

パアン、と、何かがはじける音がした。

暗い天井。汗まみれの重い体。浅い呼吸を繰り返して、咳き込む。

「パパ……パパ……？」

ゆっくりと上体を起こして、なにも見えていないまま腕を伸ばして何かに縋ろうとする。だが、その手はなにも掴めない。呼吸が苦しい。伸ばした腕を自分の方に戻して、口を手で覆う。額から冷たい汗が白く細い指にまで伝ってくる。同時に、震える瞳から生温い涙が溢れてきて、彼女の手を濡らす。

「うう……」

胸が痛い。ガタガタと体が震えて、まともに呼吸ができない。

苦しい。苦しい。

あまりの苦しさに身を屈めて、ベッドに横たわる。体は痙攣を起こし、顔からは血の気が失われていく。

「アル……？ 起きてるの？」

と、部屋のドアが開く音が聞こえた。廊下の柔い光が自分のことを照らしている。ドアを開けた寝巻き姿の少女はゆっくりとこちらに寄ってきて、自分のことを覗き込む。

途端、顔色を変えて。焦った様子で部屋を出て行き、何かを言っすぎてさま走って戻ってきた。寝台の上の洋灯を点け、華奢な腕で自分のことを起き上がらせてくれる。

「アル、アル？ 大丈夫？ 聞こえる？」

頬を叩かれているのは分かる。でも体は思うように動いてくれない。声も出せない。と、もう一人誰かが部屋に入ってきた。背の高い青年だ。彼は目の前にいる少女となにかを喋って、今度は彼が体を支えてくれる。

「ほら、アル。飲める？」

口に錠剤を当てられ、なんとか口に入れる。次にコップをあてがわれ、ゆっくりと、中の白湯を飲む。荒い呼吸の中、じんわりと温かい白湯が体内を滑り落ち、乱れた鼓動を鎮めてくれる。

「さ、もう大丈夫よ。そばにいるから。ゆっくりおやすみなさい」

未だ震える手を優しく握られて、なんとか一度頷く。青年はその様子を見て自分を横たわらせてくれる。どちらかの手が、そっと額を撫でてくれた。

次に目が覚めたときには、部屋には明るい朝日が差し込んでいた。豪華な装飾のシャンデリアが天井に見える。右手に違和感を覚えて、ゆっくりとそちらに顔を向ける。一人の少女が、自分の手を握って眠っていた。ストレートロングのベージュの髪はいつも艶めいていて美しい。

「ん……？ ああ、もう朝なの？」

少女はゆっくりと瞼を上げ、体を起こす。サファイアブルーの美しい瞳。彼女はそこに自分を映すと、安堵したように一息ついて囁くように言った。

「おはよう、アル。もう大丈夫？」

「……おはよう、ラキ……」

「もう。声がかサカサよ？ ほら、お水。飲める？」

自分でも驚くほど掠れた声だった。ラキ、と呼ばれた少女は苦笑いしてアルの体を起こしてやり、水を手渡した。こくこくと音を立てながらアルは水を飲み干して、一息つく。

「……ごめんね、ラキ。わたし、また……」

「いいのよ、別に。ほら、今日は良いお天気よ」

ラキは切なげな笑顔で言って立ち上がり、部屋のカーテンを開けて振り返った。

「朝食の用意をしてくるわ。少し待っていてね」

アルが頷いたのを笑顔で見届けて、ラキは部屋を出て行った。一人になったアルはゆっくりとベッドから足だけを降ろした。

良い天気。冬の乾いた空はどこまでも青い。大きな窓からは太陽光がこれでもかと言わんばかりに降り注いでいる。地面にはところどころに雪が積もっている。

「はあ……」

清々しい天気とは対照的に重く深いため息をついて、アルは寝台に置かれている小さな化粧箱を見下ろした。三日月型の装飾が施された美しい箱。じっと見つめて、再度ため息をついた。

それから彼女は、枕元にいる青いドレスを着たクマのぬいぐるみを膝の上に乗せ、無言で見つめていた。

しばらくして、部屋のドアがノックされる。ラキかと思い、どうぞ、と小さく応える。しかし入ってきたのは、騎士団の正装である真っ青なジャケットに真っ白なズボンを履いた背の高い青年だった。

「おはよう、アル。具合はどう？ 大丈夫？」

ラキとよく似たページュ色の髪に、サファイアブルーの瞳。微笑みを絶やさない彼はその顔によく合う甘い声色でそう言って、純白の手袋を外してアルの頭を撫でた。

「うん、大丈夫。ごめんね？ 昨日はタキまで起こしちゃって……」

「平気だよ。アルが無事で良かった」

タキ、と呼ばれた青年は笑顔で言って、アルの隣に腰掛けた。そして頭を撫でた手でそつと頬を撫でてやる。アルはぬいぐるみを強く抱き締め、涙目になって顔を上げる。

「でも、タキ……わたし……」

「なにも言わないで？ 謝らなくていいよ」

「……………」

真っ青な瞳に映る自分の姿が嫌になるほど情けなくて、アルは唇を噛んで俯いた。タキがそんな彼女の顔を覗き込むようにしてなにか声をかけてやろうと口を開きかけたとき、ドアをノックする音が聞こえた。

「……はい、どうぞ？」

「失礼します」

入ってきたのは、身だしなみを整えて真っ黒なワンピースに真っ白なエプロンを着けたラキだった。色白の肌はまるで陶器のようで、お人形のような。彼女はアルを見て、隣にいるタキに目をやって呆れたように言った。

「兄さん……」

「ん、なに？ 僕がいちゃダメ？」

ラキはなにも言わないまま、トレイに乗せた朝食を運んできてくれた。

「はい。ゆっくり食べてね」

「うん。ありがとう、ラキ」

ぬいぐるみを置いて、代わりにトレイを受け取ったアルは朝食を見下ろし、祈りの言葉を口ずさんでから食事を始めた。ちゃんと食べているのを確認したタキとラキはどこか安堵したように肩から力を抜く。